

学力向上のための手びき

【第2版】



平成29年1月
西部教育事務所

もくじ

☆ 作成にあたって _____ P. 1

～ 第一部 『西部型授業』～

I	『西部型授業』の基本的な流れ	_____	P. 2
II	日々の授業づくりの基礎・基本【チェックシート】	_____	P. 3
III	『西部型授業』の実践	_____	P. 4～7
1	つかむ	P. 4
2	見通す	P. 4
3	考える	P. 5
4	考え合う	P. 5, 6
5	振り返る	P. 7

～ 第二部 日々のよりよい授業づくりに向けて～

IV	授業を支える指導技術	_____	P. 8～16
1	発問・指示と板書	P. 8, 9
2	I C Tの活用	P. 10, 11
3	言語活動の充実	P. 12～14
4	学習規律	P. 15, 16
V	家庭学習について	_____	P. 17～19
1	家庭学習を通して育てたい子どもの姿	P. 17
2	授業につながる宿題	P. 17, 18
3	自主学習への取り組み	P. 18, 19
4	やる気を引き出す手立て	P. 19
VI	指導案作成にあたって	_____	P. 20～25
1	指導案の作成と活用	P. 20
2	指導案作成のためのポイント	P. 21
3	指導案の具体例	P. 22～25

☆ 参考文献 _____ P. 26

☆ 作成にあたって

西部教育事務所では、「学力向上」に向けて、管内各地域及び各市町・小中学校がこれまでの実践の中で大切にしてきたことを形にしていきたいと考え、この手びき作成に取りかかりました。東松浦地域では『『とうまつ5 (ファイブ)』指導のポイントと授業改善チェックリスト』、杵西地域では『杵西型授業』と学力向上の手びき、藤津地域では『『よりよい授業づくり』に向けての学力向上対策パンフレット』等の資料があります。これらの貴重な財産を参考にしながら再整理しました。

第一部『西部型授業』は、「子ども主体の考える授業」を組み立てるための基本的な学習過程や学習活動及び指導上の留意点についてまとめました。子どもの確かな学力の定着・向上を図るため、これまであたりまえのこととして進められてきた基礎・基本でもあります。どんな指導方法であれ、指導過程の中で忘れてはならない共通項があると思います。その共通項を振り返ることで、よりよい授業づくりが実践され、ひいては子どもの学力向上につながると考えます。その柱となるのが、以下に挙げる5項目です。



<必須5項目>

- A 授業の冒頭で、具体的なめあてをつかませる
- B 見通しをもたせて、学習の方向性を明らかにする
- C 考えをもたせるための手立てをとる
- D 考えを交流し、広げ深める手立てをとる
- E めあてや学習全体を振り返り、まとめる



日々の授業実践について、「チェックシート」で振り返りながら活用していただければ幸いです。


第二部『日々のよりよい授業づくりに向けて』は、以下の3点に着眼してまとめました。

- (1) 全教科等の授業を支える指導技術として、「発問・指示と板書」「ICTの活用」「言語活動の充実」「学習規律」を取り上げ、そのポイントを示すこと
- (2) 授業とつながりの深い「家庭学習」について取り上げること
- (3) 授業づくりの根幹となる指導案作成のポイントを示すこと



子どもに確実に力をつけていくためには、よいと思うことを自信持って毎時間続ける「継続と徹底」が大切です。また、個人として実践するのではなく、全職員で共通理解をして取り組むことが必要です。先生方一人一人の共通理解・共通実践を通して、子どもがさらにかしこく・たくましくなることを願っています。

I 『西部型授業』の基本的な流れ

学 習 過 程		学 習 活 動（○は、指導上の留意点）	I C Tの活用
導 入	1 つかむ	<p>(1) 学習への意欲をもつ。 ○驚き、不思議さ、必要感、疑問や問題点等を感じ、意欲をもって学習に臨めるような課題を提示する。</p> <p>(2) 学習のめあてをつかむ。 ○めあてを本時の目標に沿って焦点化する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・動機付け，意欲付けとなる学習課題の提示
	2 見通す	<p>(1) 学習の方向性をつかむ。 ○1 単位時間の活動の流れを具体的に示す。 ○子どもが解決方法を分かるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・解決方法や進め方の提示 ・資料やモデルの提示
展 開	3 考える	<p>(1) 一人またはグループでじっくり考える。 ○考えさせる時間を設定する。</p> <p>(2) 自分の考えをもつ。 ○必要に応じてヒントカードやキーワードを示すなど，個に応じた支援を行う。</p>	
	4 考え合う	<p>(1) 他者と交流し，考えを共有する。 ○根拠や理由を明確に言うことができるようにする。</p> <p>(2) 多様な考えをもとに，自分の考えを広げ，深める。 ○子ども同士が考えを比較・検討し，補完・修正等を行い，よりよい考えを見いだすようにする。</p>	
終 末	5 振り返る	<p>(1) 学習のまとめをする。 ○めあてに戻ってわかったこと・できたこと等をキーワードで示し，まとめを書く。</p> <p>(2) 自己評価をする。 ○達成状況がわかる評価項目を設定する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・まとめの提示

Ⅱ 日々の授業づくりの基礎・基本【チェックシート】

次のことを確認しましょう！

Check!

1 つかむ (4ページを参照)

- 意欲を高める手立てをとっていますか
- めあてを板書していますか
- めあてを読ませたり、書かせたりしていますか
- めあては、終末で自己評価ができるものになっていますか

2 見通す (4ページを参照)

- 1単位時間の活動の流れを具体的に示していますか
- 結果の予想や解決方法の見通しをもたせていますか

3 考える (5ページを参照)

- 子どもが考える時間を確保していますか
- 自分の考えをもたせるために、ヒントカードやキーワードを示すなど手だてをとっていますか
- 考えたことを書かせていますか

4 考え合う (5, 6ページを参照)

- 他の人と考えを交流する場を確保していますか
- 交流のための具体的な視点を示していますか
- 子どもの発言をつなげたり、比べたりしていますか

5 振り返る (7ページを参照)

- 学習のまとめを行っていますか
- 子どもに自己評価をさせていますか
- 時間内に終わっていますか

今日の授業は、みんな
がんばっていたなあ。

子どもに力は
ついたかな？



次の時間は…
そうだ！こうしよう。

先生の振り返りも、
大切ですね。

Ⅲ 『西部型授業』の実践

1 つかむ

(1) 学習への意欲をもつ

- ① 「なぜかな」「調べてみたいな」と子どもたちが感じるような課題の提示を心がけましょう。
 - 既習事項と比較して違いを明らかにする。
 - 複数の資料を提示して疑問をもたせる。
 - 一部を隠して予想をさせながら、少しずつ提示していく。
- ② 具体物を見せたり，ICTを活用したりして，課題をイメージしやすくしましょう。



(2) 学習のめあてをつかむ

- ◆ 焦点化
 - ・「これだけは必ずできるようにさせる」という強い思いで，一つか二つに絞る。
- ◆ 具体化
 - ・本時のゴールがイメージできるわかりやすいことばで示す。
- ◆ 視覚化・音声化
 - ・いつでもめあてを確認できるように板書する。
 - ・ノートに書かせたり読ませたりして，めあての内容理解を促す。

2 見通す

(1) 学習の方向性をつかむ

- ① 1単位時間の活動の流れを具体的に示しましょう。

- ◆ 何をどんな順番で行うのか
- ◆ どれくらいの時間で行うのか
- ◆ 活動が早く終わったら，何をするのか

を示す。

- ② 結果の予想や解決の方法について，すべての子どもが見通しをもてるようにしましょう。

<結果の予想>

- 既習事項や生活経験から数値を見積もったり，事柄の概要をイメージしたりできるようにする。

<解決の方法>

- 予想をもとに解決方法を決める。
- 複数の場合，課題解決のために既習の経験や知識・技能の中で何が使えるのかを考えて選択させる。



3 考える

(1) 一人またはグループでじっくり考える

- ① 見通しに沿って考える時間を確保しましょう。
- ② 子どもが考えているときには、新たな発問や指示は控えましょう。
- ③ タイマーなどを使って、設定した時間を明確に区切るように努めましょう。

途中で活動を中断させ、子どもの思考を停止させていませんか？



(2) 自分の考えを持つ

- ① 考えをまとめ整理するために、**条件に沿って書く**活動を取り入れましょう。

- ◆ 結果だけでなく、解決の過程も書く。
- ◆ 中心となる考えとともにその根拠や理由を書く。
- ◆ 思考を促すポイントやキーワードを使って書く。
- ◆ 複数の資料を比較し、考えたことを書く。
- ◆ 操作や観察をしてわかったことを図や表などに書く。

- ② 個に応じた支援を行いましょう。
 - つまずきの原因を対話や観察で確認する。(学習内容なのか、表現なのか)
 - 思考を助ける学習用具やヒントカード等を用意する。
 - 処理の速い子どもにはほかの考え方を求めたり、新しい課題を用意したりする。

4 考え合う ①

(1) 他者と交流し、考えを共有する

- ① 発言のパターンを教えて、全教科で使いましょう。

- ★ まず、「結論」を一文で、「理由・根拠」は筋道立てて(順序よく)伝える。

私は、〇〇という考えです。理由は、二つあります。一つ目は、教科書△ページから～と思ったからです。二つ目は、…。

- ② めあてに沿った具体的な視点を示すようにしましょう。

- ★ 内容と方法(「何を」「どのように」)を確認して始める。

- ・内容例 — 速くて簡単にできる方法はどれかな？
結果から考えられることは何？
資料から読み取れる事実は、どこにいくつ書かれているかな？
- ・方法例 — 話し合ったことをボードに書いて貼りましょう
一番よい考えを一つに絞りましょう
どんな考えが出たのか、報告しましょう



4 考え合う ②

(2) 多様な考えをもとに、自分の考えを広げ、深める

① 授業のゴールをイメージして、子どもの考えをつないだ交流活動を進めましょう。

ア 比較・関連づける — 共通点や相違点に気を付けて交流するように促す。



- ・「違う考えの人は?…Aさんどうぞ。」
- ・「考えは同じですが、理由は違いますね。」
- ・「Bさんが答えてくれた ○○ というのは、具体的に例を挙げるとどんなことかな?」



ここまでは、できたよ。
このあとは、どうしたらいいのかな。友達の考えを聞いてみよう。

イ 整理する — 意見全体を、大きなまとまりに分けたり、見出しを付けたりして板書する。

- ・「これまで出てきた意見は、大きく分けるといくつ?」
- ・「この3つの意見、見出しを付けてみましょう。」



ウ 帰着する — 整理された板書を見ながら、再度視点に戻ってあらためて考え直し交流を行うように促す。

- ・「主人公の思いは、この3つのうちどれが一番強いのだろう。教科書の叙述に戻ってもう一度考えてみよう。」
- ・「各班の実験結果から、間違いなく言えることは何だろうか。また、次の時間に確かめた方がいいことは何?」



エ 収束する — 交流の結果、生み出されたひとまとまりの考えについて確認し、まとめにつなげる。

- ・「どうやら、みんなの考えは ○○ ということになりそうだね。それでは、みんなでまとめてみましょうか。」



② 交流活動を進める上で、大切にしたいことは6つあります。

ア まず友だちの感じ方や考え方のよさを見つけるようにする。

イ よさを取り上げた後は、疑問点を尋ねたり納得いかない点について反論したりするように促す。

ウ 解決できていない場合は、自分ができたところまででよいことを伝え、友だちの考えを取り入れるように励ます。

エ 説明の不十分さは、友だちと一緒に考えて続きをつなげたり言い換えたりさせる。

オ 説明や発表の順番などを工夫して、有効な課題解決につなげたり、全員が参加できた喜びを味わわせたりする。

カ 新しく生み出された考えや活動そのもののよさについてふれ、交流することの意味を実感させる。

5 振り返る

(1) 学習のまとめをする

- ① めあてに戻って、「わかったこと・できたこと・身についたこと等」をまとめ、板書しましょう。
 - めあてと整合性のあるまとめを意識する。
 - まとめをノートやワークシートにきちんと残すように指示する。
 - 身につけさせたい学習内容の他にも、解決方法や交流の気づきも大切にする。
- ② 子どもが自分の言葉でまとめることができるように育てていきましょう。
 - 板書の中から、学習用語やキーワードを手がかりにまとめを書かせる。
 - 教師がまとめてしまうのではなく、子ども自身にまとめさせる。

子どもが学習内容を理解し、自らまとめを書くことができるようにしていくことが大事です！



(2) 自己評価をする

- ① 学習を振り返らせ、できるようになったことについては満足感や達成感を味わわせ、できなかったことについては次時への課題意識をもたせましょう。
＜練習問題による学習の振り返り＞
 - 学習内容や方法を使って練習問題に取り組み、知識や技能の確実な定着をめざす。
＜記述式による自己の振り返り＞
 - 意欲や関心の観点
 - ・粘り強く取り組むことができたか
 - ・次の課題を持つことができたか 等
 - 学習内容の観点
 - ・理解できたこと、身につけたことは何か
 - ・めあてに沿ってまとめることができたか 等
 - 学習方法の観点
 - ・自分の意見を伝えることができたか
 - ・協力して活動することができたか 等
- ② 継続した振り返りができるように工夫しましょう。
 - 短時間で自己評価できる工夫
 - ・項目に○を付ける
 - ・数値で表す
 - ・2～3行で記述する 等
 - 子どもの自己評価に教師の評価を返す
 - ・子どもの変容をほめる
 - ・コメントは短く印象的に

「今日の勉強で、○○ができるようになったよ!!」



子どもが「前の自分と比べてここまでできるようになった。」と感ずることができるようにすることが大切です。



IV 授業を支える指導技術

1 発問・指示と板書

◇ 発問・指示

★ わかりやすい指示や発問は、「今、何をするのか（考えるのか）」を明確にし、学ぶ意欲を高めることにつながります。子どもたちが理解しやすいような伝え方を工夫しましょう。

「発問」… 子どもの**思考**に働きかける指導行為
「指示」… 子どもの**行為**に働きかける指導行為

(1) わかりやすく話すために

- ① ゆっくりと、短いことばで話す。
- ② 具体的な言葉で伝える。
「きちんと書きます。」→「はねに気を付けて書きます。」
「あれ」「むこう」ではなく、目印や方向を示す。
- ③ 否定的な表現ではなく、肯定的な表現に言い換えてモデルを示す。
「おしゃべりしません。」→「先生の方を向いて、話を聞きましょう。」
- ④ 一文で一つの動作ができる指示をする。

きちんと書きなさい。



「きちんと」って、どう書けばいいの？



(2) 集中して聞かせるために

- ① 見通しを明確にする。



・「これから3つのことを話します。」
・「〇〇について話します。」



今から、3つの話があるんだな。
1つ目は何だろう？

- ② 話集中できる環境を作る。
 - ・全員が聞く姿勢を整えてから、発問や指示をする。
 - ・「大切なことを言います。」と前置きをして話す。
 - ・教師が沈黙することで、子どもたちの注目を集める。
- ③ 場に応じた話し方を工夫する。
 - ・大事なことを伝える時には、話し方をかえてみる。

時には、こんな話し方も!!

- ◆わざと小さな声で
- ◆大きな声で強調する
- ◆ゆっくりと話す

(3) 多様な考えを引き出すために

- ① 発問の後は、考える時間をとる。
- ② 一問多答になる発問を工夫する。
- ③ 教師は発言を減らし、時には沈黙することによって考えさせる。
- ④ 子どもが思考したり作業したりしているときは、それを妨げるような発問や指示は控える。



☆ 板書

★ 板書は、学習内容をわかりやすく子どもに示すものです。学習する内容や活動を整理し、知識の習得を容易にさせたり、理解や思考を深めたりするのに効果的です。

(1) 板書の意義

① 学習内容の要点がわかる。

・大事な部分は、四角で囲んだり、色をかえたりして強調する。

② 1 単位時間の流れがわかる。

・学習過程のカード（**めあて**・**見通し**・**まとめ** 等）を用いて学習の流れを示す。

③ 子どもの思考を助ける。

・子どもの考えの関係性がわかるように、矢印で示したりつないだりする。
・比較しやすいように、上下・左右に資料を並べる。

④ 授業の記録として授業を振り返ることができる。

授業が終わって板書を後ろからながめ、自分の授業を振り返ってみることも大切です。



(2) 板書すべき内容

「本時のめあて」を必ず板書するとともに、めあてに応じた言葉で、「本時のまとめ」を書く。

板書すべき内容

- ① **本時のめあて**
- ② 予想、解決のための方法や手立て
- ③ 子どもの考え（思考の流れを意識して）
- ④ 学習内容に係る重要発言や重要語句
- ⑤ **本時のまとめ**

(3) 板書を効果的に生かすために

① 見やすくわかりやすく

- ・一番後ろの子どもにもはっきり見える大きさと書く。
- ・色チョークを活用する。（色についての約束事を決めておく）
- ・立ち位置を考え、自分の体で板書を隠さないように気をつける。
- ・図や表、写真などを活用する。

② 子どもとの関わりを大切に

- ・子どもの発言は簡潔にまとめて書く。
- ・板書しながらの説明は避ける。

黒板に向かって話をしていませんか？



2 ICTの活用

教科指導におけるICTの活用は、学力向上の有効な手段です。電子黒板やプロジェクタ等のICT機器を活用した学習は、国の実証研究から、子どもの学習に対する関心・意欲だけでなく、知識や理解、さらには、思考力や判断力が高まることが確認されています。

教科の目標を達成するために、教師や子どもが、学びのツールとしてICTを活用する場面を設定し、よりよい授業づくりをめざしましょう。

(1) 授業でのICTの活用の位置づけ

何のために、どんな場面で、どのように活用するのか、授業計画を検討しましょう。

- ① 学習に対する子どもの**興味・関心を高める**ために
- ② 子ども一人一人に**課題を明確につかませる**ために
- ③ **わかりやすく説明**したり、子どもの**思考や理解を深めたり**するために
- ④ 学習内容をまとめる際に子どもの**知識の定着を図る**ために



コンピュータや提示装置などを活用して、資料などを**効果的に・わかりやすく**提示する。



(2) 授業でICTを活用するときの留意点

① 実物とICT

授業では、実物を見せる方が教育効果は高まります。提示できるのであれば、実物を見せるべきです。しかし、ICTの利点として、拡大する、止める、隠す、繰り返す等ができるので、実物よりも効果的に見せることができる場合があります。

② 板書との併用

ICT機器で提示した資料等は板書のように残りません。大切な事項は板書等を併用し、ノートをとらせ、子どもが振り返ることができるように工夫することも大切です。

③ ICTをツールとして

授業でICTを活用さえすれば教育効果が高まるというものではありません。ICT活用の場面やタイミング、発問、指示や説明等、教師の授業力も重要です。

(3) 授業でのICTの活用例

授業におけるICT活用場面の多くは教材の提示です。その際、電子黒板があれば、教材の提示や操作をするときに確かに便利です。しかし、電子黒板がICT機器のすべてではありません。プロジェクタやデジタルカメラなど、学校に今ある機器を使って、できるところからICTの活用をすすめましょう。

ICTのひと工夫

① デジタルカメラを使って

デジタルカメラで撮影した画像や動画は、パソコンを使わなくても、TVモニターやプロジェクタに接続すれば、そのまま再生できます。教科書の図やグラフ、子どものワークシートなどを撮影して大きく映せば、子どもの視線がスクリーンに集中し、指示が通りやすくなります。

② 動画を「見せる」「聞かせる」

パソコンで動画を見せる場合、見せ方によっていろいろな効果が生まれます。例えば、画面を隠して音声だけを聞かせたり、音声を消して画面だけを見せたりすることで、違った動画の活用法が生まれることもあります。

衛星画像や空中写真を拡大提示して、日本や世界の諸地域の地理的事象に対する関心を高めるようにする。

(小学校 第5学年, 中学校 社会)

「月と太陽」において、月の表面の様子について、児童に驚きや感動を与えるように、大画面で鮮明な映像を拡大提示する。

(小学校 第6学年 理科)

「立体図形」において、児童がノートに描いた見取り図や展開図を拡大提示し、いろいろな考え方を共有する。

(小学校 第5学年 算数)

いろんな場面で
使えそうね。

映像と音声を繰り返し示して発音等をさせることで、英単語の意味や読み方を確実に理解できるようにする。

(中学校 全学年 英語)

教科書の問題文を拡大提示し、学習の課題を確実につかませるようにする。

(小学校 算数, 中学校 数学)

3 言語活動の充実

・言語活動とは、

「学習活動の大半を占める『話す』『聞く』『書く』『読む』の4つの形態に分かれる言語行為そのもの」を指します。

・言語活動の充実とは、

指導者が各教科等の指導を通して、児童生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、目的に合った言語活動を手段として意図的・計画的に行う働きかけのことを指します。

以下に挙げる事項は、日常的に全教科で活用していく言語活動の充実を図るための基礎となる指導の例です。

(1) 小集団活動の意義や方法を指導する

今日、教師の説明や発問によって活動を一齐に進める授業形態だけでなく、グループで活動するという「学び合い」の授業形態を取り入れている学校も多いようです。こうした授業形態は子どもたちにとって楽しく魅力的なものです。しかし、その長所と短所についても指導者は知っておくべきであり、明確な意図を持って活動を仕組む必要があります。

① 小集団活動の利点と課題

<利点>

- ア 一人一人の作業や発言の機会が増え、学習意欲の高まりが期待できる。
- イ 子ども相互の助け合いや支え合い、学び合いにより学習効果が高まる。
- ウ 子ども同士が少人数で活動し合えることから緊張感が和らぎ、思ったことが言いやすく、したいことがしやすくなる。

<課題>

- ア グループの数を増やすと、個々のグループへの教師の指導時間が少なくなる。その結果、適切な評価が不足して子どもの活動意欲が低下したりする場合もある。
- イ 小集団による助け合い、教え合いは、集団としての成果をあげることが期待できる反面、他者に依存しすぎて個人としての力量を発揮できない子どもが出てくることもある。
- ウ 少人数であるために、お互いの序列が固定化して、指示する側と指示を受ける側などの望ましくない役割分担が決まってしまうといった危険もはらんでいる。
- エ よりよい見方や考え方が出されても、貴重な意見が一部にとどまってしまう学級全体の学習に生かされないこともある。

② 小集団活動を生かすためのポイント

- ア 日頃から学級の望ましい仲間づくりを心がける。
- イ 小集団活動がふさわしい学習内容であるかを十分検討する。
- ウ 小集団学習の時間こそ教師は忙しくならねばならないと自覚する。
- エ 集団を構成する一人一人が主体的に活動でき、自分の考えを持つことができるように常に鍛えていく。
- オ 「話し合いの仕方」「友だちの発言の受け止め方」などの技能を十分指導し、その実態に見合うレベルの話し合いを仕組むように配慮する。
- カ 目的に応じて、子どもの実態に応じて小集団の構成は弾力的に行うようにする。



(2) 発表や全体での話し合いを指導する

どの教科でも、活動の最後に全体での話し合いを設定することが多いと思います。この場は、生み出された考えを整理・類型化したり、結論を絞り込んだりするための大切な時間です。「発言の量や質」「話し合いの活性化」が大きな鍵を握るといってもいいでしょう。スムーズにまとめへつなぐためにも、個々の考えのよさや違いを認め合うことのよさを実感させるためにも、教師の適切な指導が必要です。

① 「聞き方の基礎」を指導する

ア ルールを教える。

- ・「話し手に体を向ける」「うなずいたり、相づちを打ったりしながら聞く」など
- イ 一番伝えたいことは何かを聞き取る。
- ウ 自分の考えと比べながら聞く。
 - ・「自分と考えは同じか」「違うところはどこか」
- エ 話し手の意図や気持ちを考えて聞く。



② 「説明する力（発表力）」をつける

ア 何のことについて話すのかを伝える。

- ・「これから、〇〇について説明します。」
- イ 結論を先に話す。
 - ・「私は、〇〇については…だと思います。」
- ウ 内容（理由）の項立てを意識して話す。
 - ・「その理由は三つあります。まず、次に、最後に」
 - ・「その結果、二つのことがわかりました。第一に…と言うことです。第二に…」
- エ 意見や質問を求める。
 - ・「私の考えについて、みなさんはどう思いますか。意見や質問をお願いします。」

③ 「意見・質問の力」をつける

<意見>

- ア 賛成「私は、…さんに賛成です。」「…さんの考え方はいいと思います。」
- イ 反対「私は反対です。」「…は違うと思います。なぜなら、…の点で…。」
- ウ 修正・視点の転換「私は、次のように考えましたが、どうですか。」
- エ 補足「…さんの意見につけ加えます。…もあると思います。」

<質問>

- ア 聞き直す「もう一度言ってください。」
- イ 理由を問う「…のところは、なぜそう考えたのか
わけを教えてください。」
- ウ 確認「今…さんが言われたことは、…ということ
ですね。」
- エ 詳しく内容を問う「…がよく分かりません。例をあげて
説明できますか。」



(3) 書く活動（ノートを使い方）を指導する

書く活動は考える力を育てます。書くことにより、自分の思考過程を整理し、考える内容を明確にすることができ、思考力・判断力・表現力の育成に直結することになります。書く活動を充実させるには、「何をどのように書かせるか」「書いた内容をどう評価するか」という視点を指導者がしっかりともち、きめの細かい丁寧な指導を行うことが大切です。

① ノートの約束を決める

<約束の例>

- ア 日付、教科書のページを必ず明記する
- イ 「小見出し」の欄をあらかじめ決める
- ウ 「めあて」や「まとめ」を書く 【色を決める。線で囲む】
- エ 番号や記号の使い方を決める



② 目的によって使い分ける（書き分ける）必要があることを教える

<ノートの使い方の類型>

- ア 練習・反復的な使い方（漢字の書き取りや計算の練習など）
【正しく・できるだけ速く】
- イ 記録（メモ）的な使い方（自分の意見、友達の発言、板書、教師の説明など）
【必要な量を・効率的に使いやすく】
- ウ 整理・保存的な使い方（調査・観察したことや気づきのまとめなど）
【論理的に・美しく】
- エ 思考（探求）的な使い方（疑問点、問題点などを考え、生み出した思考を綴るなど）
【生み出した考えを広げ、束ねる】

③ 条件に沿って書くことを指導する

- ア 各教科等で学習する用語や表現を使って書く
- イ 主語・述語を明確にして書く
- ウ 字数・テーマを決めて書く
- エ 説明を意識して筋道立てて書く



ノートに書くことを嫌がる子どもには、上のように多様な使い方があることを紹介し、日常的に「ほめる」ことを意識しながら指導を続けることが大切です。日々の努力が確実に形となってノートに残ることに、子どもたちは充実感や成就感を感じることができます。

また、授業の中でワークシートを使用する場合がありますが、使用後はノートに貼ることで学習の連続性を保つことが大切です。「書く時間の確保」は「思考する時間の確保」でもあり、学習記録を残す大切な役割を担うものです。この意味を子ども自身が自覚できれば、理解や思考につながる記述や創造的な記述ができるようになります。ノートを「思考のあしあと」として活用する学習指導を展開しましょう。



4 学習規律

(1) 学習規律の必要性

学力の向上を図るためには、子ども主体の授業づくりとともに、子どもが落ち着いた環境の中で学習できるための学習規律を身に付けさせることが必要です。そのためには、全職員で共通理解し、継続して指導していくことが大切です。

以下の例を参考に、各学校の現状にあった学習規律を作り、実践していきましょう。

【学習規律の例】

<p style="text-align: center;">授 業 前</p> 	<p style="text-align: center;">学習の準備をする。</p> <ul style="list-style-type: none">・ 休み時間に、次の時間に必要な用具を準備する。・ 特別教室や体育館へ移動する。 <p style="text-align: center;">席に着いて待つ。</p> <ul style="list-style-type: none">・ 授業始まり△分前までに席に着く。・ 席に着いたら、教科書を読む。
<p style="text-align: center;">授 業 中</p> 	<p style="text-align: center;">始めと終わりのあいさつをする。</p> <ul style="list-style-type: none">・ 授業の始まりと終わりであいさつをし、けじめをつける。 <p style="text-align: center;">正しい姿勢で学習する。</p> <ul style="list-style-type: none">・ 背筋を伸ばして座る。・ 筆記用具を正しく持つ。 <p style="text-align: center;">聞き方・話し方のルールを守る。</p> <ul style="list-style-type: none">・ 話している人の方を見て、最後まで聞く。・ 相手や場に応じた言葉遣いで話す。・ 私語をしない。
<p style="text-align: center;">授 業 後</p>	<p style="text-align: center;">用具の片付けをする。</p> <ul style="list-style-type: none">・ 授業で使ったものを決められた場所に片付ける。 

(2) 指導する上で大切にしたいこと

学習規律を身に付けさせるには、継続と徹底が大切です。以下のことに留意しながら取り組みましょう。

① 全職員で共通理解・共通実践を行う。

学習規律の定着のためには、全職員で一貫した指導をすることが大切です。めざす姿や指導のポイントを明確にし、共通理解して取り組みましょう。

② 学習規律を守ることの意味や良さを、わかりやすく伝える。

子どもが学習規律の必要性を理解し、自分たちで守ろうという意識をもつことが大切です。そのために、学習規律を守ることの意味や良さを子どもにわかりやすく伝えましょう。

③ 重点項目を絞って、徹底して指導する。

長期休業明けの学年の始めや学期の始め、行事の前後が肝心です。子どもの様子を見ながら、重点項目を絞って指導することも大切です。

(例) 長期休業明けの始めの1週間：「学習用具をそろえる」

体育大会や修学旅行の前後：「時間を守る」

④ 朝の会や帰りの会等で、振り返る。

学習規律について、子どもが振り返る機会を設定しましょう。できていること、できていないことを自覚することはとても大切なことです。また、できるようになったことをほめることで、子どものやる気につながります。

(例) 「今週は全員が授業の始まりまでに、席に着くことができましたね。」



⑤ いつでも確認できるようにする。

教室に掲示したり、リーフレットにして子どもに持たせたりして、いつでも確認できるようにすると効果的です。

⑥ 小中連携、家庭との連携を図りながら取り組む。

学習規律の定着のために、小学校から中学校にかけて継続した指導を行いましょう。また、学校で取り組んでいる学習規律を家庭に発信し、家庭と連携して取り組みましょう。



V 家庭学習について

1 家庭学習を通して育てたい子どもの姿

家庭学習の習慣や
方法を身に付けた
子ども



基礎的・基本的な学習内容を身に付けた
子ども

生活時間の有効な使い方を身に付けた
子ども

家庭学習には、教師側が課す復習や予習などの宿題や自分で課題を見つけ取り組む自主学習があります。家庭学習の中に復習や予習を効果的に取り入れることで、授業と家庭学習の連続性を図ることができます。また、「基礎的・基本的な学習内容」の習得を図ることができます。さらに「生活時間の有効な使い方」なども身に付けさせることができると考えます。

2 授業につながる宿題

(1) 復習的な宿題

復習で大切なことは、学習したことを家庭で振り返ったり、確実にできるかどうか確認したりして、学習した内容を定着させることです。

- ・授業の内容を復習できる宿題を与える（授業で学習したことを定着させる）
- ・子ども一人一人の能力に応じた宿題を与える（教科書、ワークブック、自作プリント等）

(2) 予習的な宿題

予習で大切なことは、分からないことをはっきりさせることです。分からないことが授業で解決するからこそ、次の授業への期待や意欲が生まれてきます。

- ・次の授業に期待が持てる宿題を与える（次の授業への抵抗感を減らす）
- ・次の授業内容と既習の学習内容を関連付けた宿題を与える（次の授業のレディネスを形成する）

(3) 授業の内容を発展させる・生活の中で生かす宿題

- ・授業の内容を発展させた宿題を与える
- ・生活の中につながりを見つけ、生活に生かす宿題を与える

(4) 宿題を出す時の留意点

① ねらいと学習方法を説明する

次の3つのことを子どもに伝えましょう。

ア 効果：「この宿題でどんな力がつくのか」

イ 目的：「何のための宿題なのか」

ウ 方法：「どのように勉強するのか」

(何を使うのか、どのように書くのか、提出期限、など)



例えば、「漢字の練習」でも、ねらいが違えば練習の仕方も変わってきます。

- ・正しい字形の習得がねらいなら
 - ・・・大きくゆっくりと書けるように練習させる
- ・新出漢字の習得がねらいなら
 - ・・・文字を見ないで正確に書けるように練習させる

② 授業に生かす

宿題の内容を授業の導入や展開で扱うことによって、子ども自身が家庭学習の必要性を感じ、積極的に取り組むようになると考えます。また、「宿題をしてきて良かった」という喜びが、さらなる学習意欲の向上へとつながります。

③ 量を調整する

特に中学校では、教科ごとに宿題が出されるので、学年での宿題の量を把握し調整する必要があります。

各教科の宿題がある程度決まっていれば、学年で一覧表にまとめてみましょう。宿題の量の調整ができます。また、子どもに配布すると、宿題の確認ができ、見通しを持った家庭学習に取り組むことができます。

④ チェックと評価を大切にする

提出状況や子どもをつまづきを把握し、指導を行う必要があります。

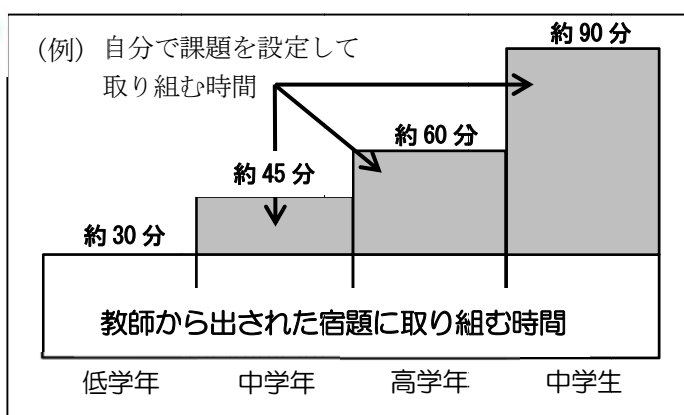
また、教師が自身の授業について振り返り、授業改善につなげることができます。

3 自主学習への取り組み

(1) 宿題と自主学習のバランス

家庭学習の時間・内容は、学年に応じて設定しましょう。

また、家庭学習の時間は、あくまでも標準であり、子どもの発達段階や個人差を考慮する必要があります。



(2) 学び方を学ばせる

① 家庭学習のルール (例)

- ・ 1日〇ページ以上書く
- ・ 日付とテーマは必ず書く
- ・ 勉強した時間を毎日記録する
- ・ 振り返りを書く など



② 家庭学習のメニュー (例)

【基礎・基本型】

漢字の練習, 文作り, 意味調べ, 音読, 視写, 言葉集め, 計算練習, 教科書問題の復習, 観察絵日記, 実験・観察のまとめ, 調べたことをまとめる, 地図をかく, 音符・符号調べ, リコーダーの練習 など

【活用型】

おはなしづくり, ローマ字日記, 問題づくり, 身の回りの算数見つけ, 図形をかく, 県・国調べ, 歌詞を書く, 季節見つけ, 今日のニュース, 〇〇な話, 料理のレシピ など

(3) 生活時間の見直し

家庭学習時間を確保するために、家庭での生活時間を見直す必要があります。自分で学習時間を作り出そうとする態度は、見えない学力（「自分をコントロールする力」「自己決定力」「集中力」など）が身に付きます。

- ・ タイムマネジメント
- ・ 生活日誌（学活ノート）の活用
- ・ スケジュール表の作成（学習目標, 内容, 時間, 自己評価）
- ・ 帰りの会で、その日の家庭学習の計画を立てさせる など

4 やる気を引き出す手立て

(1) きちんと目を通して評価を返す

- ・ 評価コメントをつける（努力を認めてほめる, まとめ方や考えの良さをほめる）
- ・ 通信や掲示板, 帰りの会などを利用して紹介
- ・ 「がんばりカード」などの活用
- ・ 学習の履歴, ノートや家庭学習の記録
- ・ 家庭への連絡 など

「可視化」

(2) やってこない? できない? 子どもへの対応

学力が問題なら…

- ・ 個に応じた内容や量を考えてみましょう

家庭環境の問題なら…

- ・ 生活実態の把握, 心的及び物的環境の改善を図りましょう



VI 指導案作成にあたって

1 指導案の作成と活用

指導案には、目標や指導上の留意点、評価の観点など、学習指導を進める上で考えるべき重要な内容が含まれています。必要な内容に備え、授業や研究に役立つ機能的な指導案を作成することは、充実した授業に直結することであり、子どもに確かな学力を身に付けさせる上でとても重要であるといえます。

指導案を作成することで、一人一人の子どもの課題、指導内容、授業の流れ、具体的な支援などが明確になります。また、教員間での共通理解を図ることにもつながります。

【指導案の意義・機能】

(1) 授業の足場を固める。

授業者は指導案を書くことにより、自分自身の授業に対する意図が明確になり、自信を持って授業に臨むことができる。

(2) 授業を進める実行案となる。

本時の授業展開の部分では、大まかな授業の流れだけでなく、課題や発問、助言、学習形態、資料、教具、教材など授業展開を支えるものを具体的に思い描きながら書くので、実行案として機能する。

(3) 授業評価の手がかりとなる。

指導案どおりに進められる授業が望ましいが、そうでなくても実際の授業を思い返して授業の検証をしていくことができる。

(4) 相互吟味の手がかりとなる。


指導案は、共同研究者や授業参観者にとって、授業の意図や工夫を検討する手がかりとなる。

指導案を作成する上で大切にしたいこと

教員という指導のプロとして、普段から考えていることを書き綴るのが指導案です。指導案の中で次のような点が明確になるようにしましょう。

- ◇ その授業がどのようなねらいで行われるのか
- ◇ どのような指導の工夫をして1時間のねらいに到達するのか
- ◇ 子どもの課題や理解度の差にどのように対処していくのか

2 指導案作成のためのポイント

<h3>単元観・教材観</h3>	<p>・本単元で学ばせたいことや、教材の特徴や特性などを記述します。</p> <ul style="list-style-type: none"> * 本単元の学ばせる事柄の概要 * 使用する教材、題材のもつ特性や特徴 * 単元や教材の系統性 <p>各項目の記述例は、「3 指導案の具体例」をご覧ください。</p>
<h3>児童観・生徒観</h3>	<p>・学習歴や本単元にかかわる子どもの姿、客観的な実態を記述します。</p> <ul style="list-style-type: none"> * 本単元にかかわる学習歴と学んだ内容 * 身に付けさせる力における子どもの実態 * 学習を進める上での課題点や留意する点 
<h3>指導観</h3>	<p>・上の2つを踏まえながら、どのような指導をするかを記述します。</p> <ul style="list-style-type: none"> * 単元を通して行う指導の工夫 * 単元の各次や各単位時間で行う指導の工夫 * 個別の支援や他教科や学校生活・社会生活との連携 
<h3>単元の目標</h3>	<p>・単元を通じた目標や評価規準を記述します。</p> <ul style="list-style-type: none"> * 単元を通して身に付けさせる能力 1文でまとめて書く場合と、指導領域ごとに書く場合がある。
<h3>単元の評価規準</h3>	<ul style="list-style-type: none"> * 評価の観点ごとの身に付けさせる能力 行動を示す表現で書く。(～しようとする, ～している, ～ができる)
<h3>指導と評価の計画</h3>	<ul style="list-style-type: none"> * 毎時ごとの主な学習活動、指導上の留意点、評価とその方法 単元の評価規準で示した評価の漏れがないように計画する。
<h3>本時の目標</h3>	<p>・本時における目標や指導の詳細を記述します。</p> <ul style="list-style-type: none"> * 単元の評価規準もしくは指導と評価の計画と同じ文 基本的にこの文が評価規準（B基準）になります。 
<h3>本時の展開</h3>	<p>学習活動</p> <ul style="list-style-type: none"> * 子どもの実際に行う活動 子ども視点の文章で書く。予想される子どもの言動もこの欄に起こす。 <p>指導上の留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> * それぞれの学習活動で行う具体的な指導・支援の手立てや配慮 <p>評価</p> <ul style="list-style-type: none"> * 原則、B基準となる子どもの姿とその基準に達しない子どもへの手立て

3 指導案の具体例

単元観・教材観

POINT：本単元を通して学ばせる事柄や教材・題材のもつ特性や特徴，単元や教材の系統性を記述します。

単元を通して学ばせる事柄の概要

- ・本単元は，学習指導要領の内容（5）「…（略）…」を受けて設定したものである。（全教科）
- ・本単元は日本の文化を英語で表現することをねらいとしている。（英語）

使用する教材・題材のもつ特性や特徴

- ・この題材は，カッターナイフを使ってはさみではできないことを経験させることで道具の正しい使い方や便利さを知り，工夫しながら造形行為を味わうことをねらいとしている。（図画工作）
- ・「重さ」は本来とても難しいものであるが，適当な単位を用意して数値化すると，通常の数と同じように大小比較ができ，加減計算などもできるようになる。（算数）
- ・教材文「言葉は動く」は，時代・世代による言葉の変化について例を挙げながら述べられている。（国語）

単元や教材の系統性

- ・面積に関する学習としては，第4学年では，1辺が1cmの正方形がいくつ分あるかということで広さを理解し， cm^2 ・ m^2 などの単位を用いて正方形や長方形の面積を求め，公式を導いている。そして，色板並べ活動や複合図形の面積を求める学習を通して，単位の保存性をとらえる経験をしてきている。さらに，第5学年の1学期に平行四辺形，台形，ひし形などの基本的な図形について学習し，作図できるようになっている。（算数）

児童観・生徒観

POINT：学習歴や本単元にかかわる子どもの姿，客観的な実態を記述します。

本単元にかかわる学習歴と学んだ内容

- ・本学級の児童は，これまでの学習で，説明文が「はじめ・中・おわり」という3つのまとまりに分けられることを経験している。（国語）
- ・これまでに児童は，自分の住む地域について，地形，土地利用の様子，公共施設について学習してきた。（社会）

身に付けさせる力における子どもの姿，学習を進める上での課題点や留意する点

- ・自力解決はできるが，自分の考えを筋道立てて説明し交流することに苦手意識を持つ児童が数名いる。（算数）
- ・朝ごはんの喫食率が高く時間内に間食できる児童がほとんどである。しかし，朝ごはんの中身を調べると，（略）全員が家庭で充実した食生活を送っているとはいえない様子がうかがえる。（学活）

客観的な実態

- ・本単元の内容に関するアンケート
（例）国語の学習は好きですか？ たばこを吸ってみたいと思いますか？
- ・本単元で行う学習活動についてのアンケート
（例）友だちと話し合うことは楽しいですか？ 分かったことをまとめることは好きですか？
- ・学習状況調査やNRTなどの結果

児童観・生徒観に出された学習歴や実態の中で，特に課題である事柄については，指導観の中に必ず反映させましょう。



指導観

POINT：単元観・教材観や児童観・生徒観を踏まえながら、どのような指導をするかを記述します。

単元を通して行う指導の工夫

- ・本単元では、「アップとルーズで伝える」と「仕事リーフレットを作ろう」の2つの教材を関連付けて、読みで学んだ技を活かして、文章を書くという流れで指導を行う。(国語)
- ・指導にあたっては、小学校の「わたしたちの国土」での学習経験を引き出しながら学習を進めていくようにしたい。(社会)

子どもの学習歴や実態を踏まえた手立て

- ・スウィングのリズムはなじみがないので、「茶色のこびん」などの他のスウィング楽曲を聞かせることで、その感じをよりつかませていきたい。(音楽)
- ・感想文を書くための参考資料や組み立て表を提示することで、「何を書いていいのかが分からない」という児童にも書いてみようという意欲を持たせたい。(国語)

学習形態や個別の支援に関する手立て

- ・話し合い活動における具体的な指導の手立てとしては、視点を基に少人数で話し合うグループ対話活動や友達の考えのよさや質問などを述べ合う全体討議など、段階を踏んだ意見交流の場を設定する。(学活)
- ・つまづいている児童には、視覚的に捉えやすいヒントカードを用意したり、小集団活動をしたりして解決の手助けになるようにしていく。(算数)

事後の指導

* 学活や道徳、家庭科など日常生活での継続活動がある場合は必ず記述します。

- ・事後指導として、「ありがとうカード」を掲示する場を設定し、日常の取り組みとして継続していく。(学活)

単元の目標と単元の評価規準

POINT：単元を通して身につける能力、評価の観点ごとの具体的な身に付けさせる能力を記述します。

観点ごとに記述した単元の目標例

- (1) 自分が大切にしているものの中から一番紹介したいものを選んで発表しようとすることができる。(関心意欲態度)
- (2) ①紹介したい宝物を選び、②必要な事柄を挙げて話したり、③大事なことを落とさずに紹介を聞き、感想を述べたり質問したりすることができる。(話す・聞く能力)
- (3) 主語と述語とを照応させて話したり、言葉には意味による語句のまとまりがあることに気付いたりすることができる。(言語についての知識・理解・技能)

各観点の目標をつなぎながら1文で記述した単元の目標例

題材 校舎やその周辺にある風景などのよさや美しさを、関・意・態 自分の「眼」(カメラ)で捉えることに関心をもち、
発想や構想 主題を基に造形的な効果を生かして創造的に写真で表現するとともに、鑑賞 他者の作品から作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などを感じ取り味わう。

単元の評価規準

* 単元目標をより具体的にしたのが単元の評価規準になります。

この例は上記の「観点ごとに記述した単元の目標例の(2)」についての具体化された評価規準です。

- ① 自分が大切にしているものの中から、友達に一番紹介したいものを選んでいく。(話題設定)
- ② 紹介する宝物のよさを考え、その特徴が伝わるように必要な事例を挙げている。(取材)
- ③ 相手が紹介したい事柄の大事なことと、自分がききたい大事なことを落とさずに聞き、友達の宝物について質問したり感想を述べたりしている。(聞くこと)

指導と評価の計画

POINT：毎時ごとの主な学習活動やねらい、指導上の留意点、評価規準、評価方法などを記述する。

国語科の例

次	時	学習活動	指導上の留意点	評価規準と評価方法
一	1 ・ 2	① シリーズ作品に登場する主人公の挿絵を見て、読んだことのあるシリーズを簡単に紹介し合う。 ② 「ふたりはともだち」のシリーズの中から3作品の読み聞かせを聞き、感想を発表する。	○ シリーズの主人公を取り上げ、シリーズ作品としての意識化を図るようにする。 ○ 好きなところを発表し合い、同じ作品でも好きなところがそれぞれ違っていることをおさえる。	【関】読んだことのあるシリーズ作品を思い出して紹介したり、自分の好きなシリーズの作品のおもしろさを伝えたりしようとしている。(発言の様子の観察を基に加点的に評価する。)

理科の例

時	学習内容	ねらい	評価観点				評価規準	評価方法
			関	思	技	知		
1	固体・液体・気体 ・ 演示実験 「水の三態変化」	水が状態変化する現象に興味をもち、状態変化と温度の関係を理解することができる。また、状態変化により物質そのものの性質は変化しないことも理解することができる。	◎				◎ 状態に関心を持ち、意欲的に状態変化の様子を観察する。	行動観察 ワークシートの 記述分析
						○	○ 固体・液体・気体の状態変化と温度の関係及び物質が温度に	ワークシートの 記述分析

音楽科の例

◆ねらい ○学習内容 ・学習活動	評価規準	評価方法 (◇) とその進め方
第3時 ◆発声や読譜の仕方を身に付け、「大地讃頌」の自分が担当する声部の役割を考えながら、自分が担当するパートを歌う。		
○ 「大地讃頌」の声部の役割を考えながら、自分が担当するパートの旋律を歌う。 ・ 各パートの発声の仕方について知る。 ・ パートに分かれて、発声に気を付けながら、自分が担当するパートを正しい音程とリズムで歌う。 ○ 「大地讃頌」の後半部分(27 小節から最後まで)を混声四部合唱で合わせて歌う。	《技-②》	《技-②》 ◇観察(教師用チェックリスト) 前時に指導した読譜の仕方や本時に指導した発声の仕方などが身に付いているかを評価する。特に「十分満足できる」状況(A)と「努力を要する」状況(C)の生徒の評価に努め、後者については併せて、適切な指導も行う。

1 単位時間の評価は、1 つないし2 つに絞ったものにします。

この評価は、記録に残す評価となります。

単元の目標 → 単元の評価規準 → 指導と評価の計画の順に目標が具体的になっていきます。

本時の目標は、基本的には指導と評価の計画の文言と同じになります。また、本時の展開の評価と本時の目標も同じ文言になります。



本時の指導

POINT：本時における目標や指導の詳細を記述します。

本時の目標

- * 本時の学習で子どもに身に付けさせたい事柄について具体的に記述します。
この目標の書き方は、子どもの学習目標として書くことが一般的です。
文末表現の例（～しようとしている。～している。～することができる。）

本時の展開

- ※ 項目は教科・領域や学校ごとによって変わってきます。一般的な例を提示します。

学 習 活 動	(○) 指導上の留意点 (◆) 評価	備 考
<p>*この欄に学習のめあてを書く。子どもに示す形で本時の活動目標を書くことが多い。</p> <p>*学習活動には、子どもの立場から各時間の主たる活動を書く。 *大項目：1 2 3 … 中項目：(1)(2)(3)… 期待する子どもの発言等は「・」で起こす。 *子ども側からの行動表現で書くようにする。 “振り返る。読む。書く。話し合う。”など</p> <p>*指導上の留意点には、学習活動における手立てや押さえておく事柄を書く。 *教師の指示や働きかけなど教師側からの表現で書く。 “見通しを持たせる。思い出させる。気付かせる。”など</p> <p>*評価規準=B基準で示し、基準に届かない子どもに対する手立てを書く。 B基準：<u>目標と同じ</u>。手立て：具体的に。 評価規準例 筆者の訴えたいことを、本文中のキーワードを使って、条件に合わせてまとめることができる。 [ワークシートの記述内容] → キーワードを提示して考えさせたり、筆者の主張部分に線を引かせたりして理解を促す。</p> <p>*この欄に学習のまとめを書く。めあてとの整合性を図り、設定する。</p>		<p>*使用するICT機器 *教科書以外の資料</p>

指導案をよりよく書くためには、よい指導案を参考にすることが早道です。ただ、研究校などの指導案は研究の柱になる部分に力点があり、一般的な指導案には取り入れにくい面もあります。佐賀県教育センターの「授業に役立つ実践研究」にはたくさんの方の指導案があり、一般的な指導案構成になっています。

参考 URL http://www.saga-ed.jp/kenkyu/kenkyu_chousa/index.htm

特に、評価に関する表記については、国立教育政策研究所が発行している「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料」を参考にしてみましょう。

参考 URL <http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryoku.html>

☆ 参考文献

- ・ 小学校学習指導要領解説 総則編 平成 20 年 8 月 文部科学省
- ・ 中学校学習指導要領解説 総則編 平成 20 年 9 月 文部科学省
- ・ 教育の情報化に関する手引 平成 22 年 10 月 文部科学省
- ・ 教師のしおり 平成 25 年度版 佐賀県教育委員会
- ・ 評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（全教科・領域）
平成 23 年 11 月 国立教育政策研究所
- ・ 国語教育指導用語辞典〔第 3 版〕 編著者 田近洵一・井上尚美 教育出版
- ・ 国語科 重要用語 300 の基礎知識 平成 19 年 9 月 大槻和夫 明治図書
- ・ 大阪の授業STANDARD 平成 24 年 5 月 大阪府教育センター
- ・ 授業づくりポイント 10 平成 22 年 3 月 仙台教育事務所

学力向上のための手びき

発行日 平成 25 (2013) 年 9 月 26 日 初版発行

平成 29 (2017) 年 1 月 10 日 第 2 版発行

発行所 西部教育事務所

〒843-0023 佐賀県武雄市武雄町昭和 2 6 5

TEL 0954 (23) 3332 FAX 0964 (23) 9751

